

NEW CROWN 授業実践事例

BOOK 1 GET READY 授業例②

M.E. 先生

指導計画表

(全7時間)

時間	学習内容・主な活動
1	コミュニケーションを楽しもう ■アルファベット順番 (大文字)
2	友達になろう (1) Sports food ■アルファベット順番と形 (小文字の高さ)
3	友達になろう (2) Vegetables fruits animals ■アルファベット音読み (アアエイ)
4	■アルファベット文字指導 大文字
5	■アルファベット文字指導 小文字
6	音とつづり 3文字の単語から4文字の単語
7	ローマ字, ローマ字との違い oo u

※文字の指導は特にスパイラルにすること。

実践例

1. 小学校との連携で段差を少なく

中学に入学して、特にわくわくして授業に望んでくれるのが英語ではないだろうか。その期待に応えるべく授業を展開していきたい。教師側から言うと、集団の型をつくり（ルールを敷き／システムを作り）、楽しいと感じさせ、できるようになりたい、できるようになりそうだと感じさせなくてはならない、勝負の時だ。複数の小学校からあがってきた生徒たちは英語の学習実態に差がある校区も多いだろう。

幸い、我が校区は、同じ指導員さんが入っており、英語学習による大きな差がない。校区での研究会も年2回開かれ、交流がある。それにも関わらず、具体的な授業の様子や、子どもの実態がわからなかったのが実情である。そして、子どもたちが慣れ親しんできた活動を把握しないまま中学の授業を展開してきた。今年度は、多くの時間を割き、小学校と連携を図っている。中学校サイドが特に入門期の授業をどう展開していくべきか、見えてきた。

小学校でたっぷり英語を聞いて、使ってきている生徒たちとの最初の授業で、生徒たちは英語を使いたくてたまらない気持ちだということを感じてはならない。初めての先生、新しい友達もおり、緊張感MAXということも理解して授業を展開しなくてはならない。そして、自分が意図する学習集団になるよう、礎を築かなくてはならないのが、入門期だ。コミュニケーション活動が機能する学習集団とは、心地よい緊張感、一体感、安心感のある集団で、それを、英語学習を通して仕組んでいくことができないかと考えている。

誰とでもペア活動・グループ活動ができる集団を作るため、授業のシステムを作る（教え込む）。（資料1のように席を入れ替わり、ペアをテンポ良く変えていく。時にクラスの半分をフールツバスケットのように席を変える）

2. 授業の展開

1 時間目

Hi, I'm 名前. I like ~. Nice to meet you. などの小学校で学習済みのことを使いペア活動をする。

Get Ready①

コミュニケーションを楽しもう pp.6-7

会話を聞かせる前に、①～⑥の場面を大きな地図の中のどこにあるか、3～4人のグループで探させる。（Where are they? Find them in this picture.）

電子黒板があるなら、生徒に印をつけさせる、なければピクチャーカードに付箋を貼っていく。

次に、同じくグループワークで、What can you see in this picture? に対する、既習の英単語を言わせる。Cat, bike, school, station, jet, train, bus, taxi, flowers, trees, birds, ice cream shop, balloon など。

このグループワークも、3～4人で1グループとする。グループからスピーカーを1人決め、その発言者のみが起立する。発言者が挙手して、発言したら、グループ内の別の人が発言者として起立する。グループ内で教え合うことはOKとする。全員が発言できたら、High Five（ハイタッチのこと）をすること、と指示をすると、初めての顔ぶれでも、恥ずかしがり屋でも協力的に参加する姿が見られる。

一時、1グループ5～6人で実施したこともあったが、4人という人数が最適なように思う。1年間、または3年間、誰とでもペアを組むことができる、誰とでもグループワークができるということをめざして学習集団を作っている。入門期では特に、協力し合う心地よさを感じさせたいと考えている。

2 時間目

Get Ready②友達になろう(1)(2) pp.8-11

Sports, food, fruits vegetables, animals... これこそ、小学校英語で慣れ親しんできた語彙と表現である。Kumi, Paul, Meiling... 少しずつ自己紹介のパターンが違ふところを活用して、ペアを変えながら何度も自己紹介をする。新しいクラスメートや、以前

から知っているクラスメートと、なじみのある語彙や表現で、自己表現しながら出会っていく。そして、教師の立場からいうと、この時期は授業のシステムを作り上げていく期間だ。私の場合、席の移動は常に右回り。グループの発言者も右回りに移動する。このようなシステムができあがれば、英語での指示も毎回スムーズに聞かせることができる。

生徒達に人気があったのは、外国の国名とその国の典型的な名前が書かれたカードをランダムに配り、その人になりきって自己紹介をするペア活動だ。

小学校で慣れ親しんだ国は10カ国以上。簡単なあいさつを知っている国もある。自分自身について会話するのも楽しいが、たまには誰かになりきるのも楽しいものである。その国の人気の職業などを知るのも、中学1年生の知的好奇心をくすぐるようである。

次に、教科書 p.9 にある、タッチングゲームと、キーワードゲームは小学校英語ではなじみのある活動である。

タッチングゲーム（資料2）：①教科書を使って語彙の確認 ②教科書の絵を切り貼りしたものを向きや位置を変え1枚のシートにする。ラミネート加工して固定のカルタのように使う。ペアで使う場合、40人クラスでも20セットあればいい。のりとはさみを使い、ランダムに絵を置くので、交換すれば何度か活動をすることができる。

キーワードゲーム:2人の間に消しゴムなどを置き、キーワードが聞こえたらとるというゲーム。テンポ良く単語をリピートさせていくのがコツ。

他：Do you like ~? Yes, I do. / No, I don't. は小学校で既習。文の構造、ルールを明示的に教えるのは中学校の役目だが、入門期にこのようなアクティビティは十分にできることを知っておかなくてはならない。

3 時間目

Get Ready③アルファベットを覚えよう pp.12-13

- 1 アルファベットの順番
 - 2 アルファベットの音
 - 3 アルファベットの形
- を、教えずにはならない。

辞書を引ける、自立した学習者に育てるためには順番を覚えさせなくてはならない。200種類以上あるといわれる ABC song の中で、きらきら星のメロディーを使ってきた。Hi, friends! のチャントでは 3・3・7 拍子のリズムである。自分の中ではバリエーションの少ない分野である。順番に関しては初日から学習するのが良いだろう。3日目である本時は、A なら、アという音とエイという音があることに重点を置く。

アルファベットの名前読みと音読みは入門期にしっかり学習させたいポイントである。フォニックスの学習も小学校によってばらつきもあるだろう。年間を通して教えることではあるが、特に入門期でのアルファベットの音読みは練習をしっかりしたい。文字を書く、単語を書く、読むということは小学校と中学校の英語の大きな段差であり、この段差を越えさせるために、ていねいな指導が必要だ。

4 時間目～5 時間目

アルファベットの形の認識をさせるとき、特に苦労するのが小文字だ。文字の形（高さ）を意識させるために手を叩きながら歌わせる。

手を叩く：a c e i m n o r s u v w x z

頭を叩く：b d f h k l t

ひざを叩く：g j p q y

その他のアルファベットの活動としては、町や、生活の中でみるアルファベットの大字探しをする（CD, JA, NHK, USJ, JAL, TV など）。様々な字体に触れさせることも重要である。勉強が得意だったはずの英語教師が、生徒の時につまづくはずもなかった、想像できないようなところで引っかかる生徒もいる。a, g などの文字の形の違いはもちろん、字体の特徴を認識する作業も必要である。言うまでもないが、明朝体で1年生の1学期テストを作るなんてもってのほかである。指導書にある CD から、教科書のフォントをまずインストールすることをすすめる。ちょっとした作業が、段差で躓く生徒を減らすことになる。

ヘボン式のローマ字の学習で、名前や地名の書き方を指導する。小学校3年生で学習する訓令式のローマ字とヘボン式は大きく異なる。5年・6年と2年間、訓令式の名前を使っている生徒がほとんど

のため、早い時期にヘボン式を教える必要がある。1学期の中間テスト、初めてのテストで、自分の名前を書かせる先生がほとんどではないだろうか。アクティビティで自分の名前を書く機会も多かろう。名前だけは、教える前に一人一人英語（ヘボン式）で書いて渡している。テストに出す限りは、定着させる時間を確保しないとイケない。

書き順にもっと触れてもいいのではないかと個人的には思っている。日本語の漢字ほどこだわっていないようだが、bやdを○と棒線と認識しないように、一筆書きさせる訓練をしている。また、30秒で26文字をきれいに書くことを意識させ、練習させている。その後の字のていねいさ、スピードに関わることだ。何でも吸収しようとする入門期だからこそ、きれいな字で速いスピードを要求している。

ビンゴゲーム：アルファベットのビンゴ、単語のビンゴなどを、多くの先生方が実践しておられるだろう。友達との関わりを持たせるためのひと工夫を紹介する。記入済みのビンゴシートを回収してシャッフルし、配り直す。誰のシートを持っているかを、言っではいけない。ビンゴを通常のようにする。リーチの人は起立する。ビンゴになったら大きな声でビンゴと言い、着席する。ゲーム終了後、ビンゴの生徒は教師からシールやはんこをもらう。「ひと言添えてビンゴシートの持ち主に返却。」

このゲームは、友達との関わりを作るために、仕組んでいる。そのために台詞の例まで示している。「あなたのおかげで、ビンゴになったよ。」「わくわくしたよ。」「きれいな字だね。」「長い時間リーチで立っていたよ。」「1番にリーチになった割にビンゴにならなかったよ。」など。英語の時間に、ほめ合う、コメントを言う、喜び合う、アイコンタクトをとる、ジェスチャーをつける、High Fiveをするといった、その素地をつくるためにも、ひと言を添えてビンゴシートを返却させている。小さな階段を上らせるように、こういったことは仕組んでいかななくてはならない。

6時間目～7時間目

Get Ready ④ 単語と音のつづり pp.14-15

小学校で学習したローマ字と英語の違いに戸惑う生徒も多い。「英語は英語なんだ」という認識を持たせ、単語を覚えるコツをつかませたい。練習する中で感覚を身につける生徒も多いが、明示的に教える方が、理解が進む生徒もいる。様々なタイプの生徒がいると言うことを認識した教え方をしていかななくてはならない。

例えばbook, schoolのようにooをウ、ウーと読むところやbus, cupのように小学校で「uはウ」と習ったのに英語では違うなど、こういった違いに抵抗のある生徒もいる。ローマ字とは違うね、と寄り添いながら英語を受け入れていく心の準備をさせていく時期である。一方で、一文字ずつの基本の音を覚え、何となく読めるようにもさせていかななくてはならない。

入門期にもう一つ大切なことは、単語を覚えるコツをつかませることである。まずは3文字の語から教えていく。単語をまず見て覚える。覚えたら、一気に書く。アルファベットを一文字一文字写しては覚えられないからだ。ノートに1行練習するときも、右利きの人は左手で隠しながら、単語を一気に書く、書けなかったら、またじっと単語を見る。こんな覚え方のコツを教え体験させていく。授業の中でミニミニ小テストと称して覚え方、練習の仕方、確認までしている。決して宿題に示してはいけない。ここは小学校との大きな段差であることを教師が自覚して、越えさせないといけない壁である。母国語である日本語でさえ、中学生になっても、新出漢字はなぞり書きから練習をしている。外国語である英語の文字を学習するのになぞり書き、視写も、たっぷりするべきである。

また、sh, chなど、ローマ字になかった英語の音、読まないマジックe, ghなどをスパイラルにlessonの授業になってからも継続して教えることは多い。授業の中で覚えることを体験させ、コツをつかませ、家庭学習のやり方を体験させる。たっぷり経験を積ませないうちに、家庭学習にゆだね、小テストをするのは無責任である。ここまでやっても、なかなか家庭学習をしてこない生徒たちなのだが・・・

この入門期の壁をうまく乗り越えさせられないと、小学校ではあんなにいきいきと活動していたあの子が、中学校では英語をおもしろくないと言っているなど、小中の連携にひずみが生まれてしまいかねない。今年度、小学校にも教えに行く中で感じたことだ。小学校では、英語学習の素地を養う活動をしっかりしている。中学校でも、コミュニケーション能力の基礎を養うことを念頭に、4技能のコミュニケーション能力の基礎を養っている。小中学校が連携し、英語を使いながら学ぶことを体験している生徒達だが、文字学習が大きな壁になっている生徒もいる。小学校の学習指導要領では、「児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションの補助として」文字を扱うようにと明記されている。それくらい、文字学習は負担の大きい、学習者にとって壁であることを、入門期を教える1年生担当者は自覚しなくてはならない。小学校の外国語活動において、校区の小学校の指導内容について、扱われる単語や表現などについてきめ細かく把握することが重要だ。

こういったペア活動、グループ活動、文字指導をスパイラルに、Lesson 1 に入ってからでも継続して行っていく。

慣れ親しんできたことでも、文字を読む、書くということは大きな段差であるということを意識して、入門期の壁を全員に越えさせたい。